戻って」は頻度が少なくそれぞれ BFHC10.3%(p<0.01)、BFHH12.0%(p<0.01)、対照施設 2.6%及び BFHC3.8%(ns)、BFHH5.5%(ns)、対照施設 4.5%であった。また対照施設では授乳がうまくなって 2.6%に対して「ミルクをよく飲んでくれた時」が 6.8%(p<0.01)と栄養として人工乳の量を与えることが母親の達成感を示していることを物語っていた。

出産直後のカンガルーケアについての感想は 81.8%～91.1%の母親が感動したと答えていた。そのうち「とても感動した」は対照施設で 69.8%であったが、BFHC では 74.9%(p<0.01)と有意に多かったが、逆に BFHH では 64.4%(p<0.01)と有意に少なく、「少し感動した」は対照施設に 21.3%対して、BFHC15.7%(p<0.01)、BFHH17.4%(p<0.01)と有意に少なかった。「あまり感動しなかった」という感想の母親は対照施設 3.5%、BFHC1.2%(ns)、BFHH1.2%(ns)と施設間の差はなかったが、「なんとなく怖かった」という感想を持ったものは対照施設 2.5%に対して BFHC0.4%(p<0.05)、BFHH0.9%(ns)と BFHC では有意に少なかった。出産直後に安心して喜びを表現できるには母子にとって身体的・心理的な安全な環境がなければならないが、BFHH での分娩室での心理的くつろぎはやや低いことを伺わせた(表１４)。

表 14　出産直後のカンガルーケアの感想

	ＢＦＨＣ		ＢＦＨＨ		対照施設	
	数	%	数	%	数	%
とても感動	1477*	74.9	990*	64.4	141	69.8
少し感動	309*	15.7	268*	17.4	43	21.3
あまり感動しなかった	23	1.2	20	1.3	7	3.5
なんとなく怖かった	7**	0.4	14	0.9	5	2.5
夢中で覚えていない	45	2.3	80*	5.2	5	2.5
その他	44**	2.2	76*	4.9	1	0.5
無記載	68	3.4	90	5.9	0	0.0
n	1973		1538		202	

5)栄養法

出産前に何らかの形の母乳栄養を希望していた母親は 9 割をこしており、特に BFHC では 97.4%と対照施設 93.2%対して有意水準 1%で多いことがわかかった。そのうち「是非母乳で」が対照施設 43.7%対して、BFHC66.6%(p<0.01)、BFHH58.4%(p<0.01)と BFH では有意に是非母乳で育てたいと願う産婦が多かった。「できるだけ母乳で」は対照施設 38.2%対して、BFHC26.5%(p<0.01)、BFHH29.6%(p<0.01)と有意に少なく、「できたら母乳で」は対照施設 11.3%対して、BFHC4.3%(p<0.01)、BFHH7.2%(p<0.01)と有意に BFH では少なかった。最初から人工乳で育てたいと希望する母親は対照施設では 0%、BFH では 0.3%であり極めて少数であった。すなわち、漠然と母乳育児がしたいとおもう妊婦は少なく、強く母乳育児を願う母親が BFH での出産を希望しているものと思われた。いずれにしろ全ての施設で 93%以上の母親が母乳育児を願っている事実は注目に値する。

表 15　希望する栄養法

	ＢＦＨＣ		ＢＦＨＨ		対照施設	
	数	%	数	%	数	%
是非母乳で	1314*	66.6	898*	58.4	166	43.7
できるだけ母乳で	523*	26.5	455*	29.6	145	38.2
できたら母乳で	85*	4.3	111*	7.2	43	11.3
どちらでもよい	37*	1.9	69	4.5	26	6.8
人工乳で	5	0.3	5	0.3	0	0.0
無記載	9	0.5	0	0.0	0	0.0
n	1973		1538		380	

*: χ 二乗検定　p<0.01

対照施設での授乳は時間授乳の頻度が高く、3 時間おきの授乳が 38.4%、3 時間おきに母親の元に連れて行って授乳 42.4%であった。

泣いたら授乳という啼泣に合わせて授乳する自律授乳に近い形態もあり、泣いたら授乳室で 8.9%、泣いたら母親の元に連れてくるが 2.9%であった。

さらに不足分を人工乳で補った母親は 17.6%、出るまで人工乳を与えたという母親は 4.2%であった。

夜間の授乳は産科のスタッフが行い母親はしない 35.5%、夜間も 3 時間おき 25.8%、泣いたら授乳室に呼ばれる 33.9%であった。

対照施設であっても母乳育児支援を行ってはいるが、不徹底であり、人工乳の追加、時間授乳、夜間は母親を休ませなくてはならないことが当然と考える施設が多いことも事実であった(表１６)。

表 16　対照施設での授乳

授乳形態	対象施設	
	数	%
3 時間おき	146	33.4
3 時間おきに母親の元に	161	42.4
泣いたら授乳室で	34	8.9
泣いたら母親の元へ	11	2.9
不足分をミルクで	67	17.9
出るまでミルクで	16	4.2
無記載	39	10.3
n	380	

夜間の授乳	対象施設	
	数	%
参加スタッフが授乳	135	35.5
夜間も 3 時間おき	98	25.8
泣いたら授乳室に	129	33.9
無記載	46	12.1
n	380	

実際に出産後 1 月の時点で行っている栄養法についての回答は「母乳だけ」が対照施設 41.1%対して、BFHC86.5%(p<0.01) 、BFHH75.1%(p<0.01)と有意に BFH の施設で高かった。また出産前に希望していた是非母乳でという希望に対して、対照施設では 43.7%であったものが母乳だけが 41.1%と低下しているのに対し、BFH の施設ではいずれも BFHC66.6% が 86.5% 、BFHH58.4%では 75.1%と増加していた。

「ほとんど母乳」は対照施設 17.9%対して、BFHC4.4%(p<0.01) 、BFHH8.1%(p<0.01)と BFH の施設では有意に少なく、「少量補充栄養」は対照施設 17.6%対して、BFHC5.2%(p<0.01)、BFHH9.3%(p<0.01)でも有意に少なかった。

人工栄養をしている母親は対照施設では 4.5%、BFHC0.5% (p<0.01)、BFHH1.0%

(p<0.01)と BFH では有意に少なく、ほとんど人工乳は対照施設では 18.9%、BFHC3.1% (p<0.01) 、BFHH6.4% (p<0.01)とこれも BFH では有意に少なかった。「母乳だけ」「ほとんど母乳」「少量補充」を母乳栄養とすると対照施設では 74.6%であるが、 BFHC では 96.1% (p<0.01) 、BFHH で 92.5% (p<0.01)が母乳育児をしていることになり、BFH では有意に母乳育児率が高かった。

表 17　現在の栄養法

	ＢＦＨＣ		ＢＦＨＨ		対照施設	
	数	%	数	%	数	%
母乳だけ	1706*	86.5	1155*	75.1	156	41.1
ほとんど母乳	87*	4.4	125*	8.1	68	17.9
少量補充栄養	102*	5.2	143*	9.3	67	17.6
ほとんど人工乳	62*	3.1	99*	6.4	72	18.9
人工乳	9*	0.5	16*	1.0	17	4.5
無記載	7	0.4	0	0.0	0	0.0
N	1973		1538		380	

*:χ二乗検定　p<0.01

表 18　授乳中に感じること

	ＢＦＨＣ		ＢＦＨＨ		対照施設（母乳の母親）	
	数	%	数	%	数	%
授乳中赤ちゃんがかわいい	1735*	87.9	1288	83.7	226	84.3
心身に心地よい	208**	10.5	166	10.8	39	14.6
授乳が辛い	16	0.8	18	1.2	5	1.9
長くて辛い	62*	3.1	95	6.2	18	6.7
頻回で大変	252*	12.8	281	18.3	51	19.0
身体が辛い	36	1.8	54	3.5	9	3.8
無記載	31	1.6	29	1.9	112	41.8
n	1973		1538		268	

*:χ二乗検定　p<0.01　　**:χ二乗検定　p<0.05

授乳中に感じることを対照施設で母乳育児をしている母親と BFH での母親とを比較した。「授乳中に赤ちゃんが可愛い」は対照施設 84.3%対して、BFHC87.9% (p<0.01)、BFHH83.7%(ns)と多くの母親が感じている。「心身に心地よい」は対照施設 14.6%対して、 BFHC10.5% (p<0.05)、BFHH10.8%(ns)と少なかった。また、「授乳が辛い」は対照施設 1.9%対して、 BFHC0.8% (ns)、BFHH1.2%(ns)といずれも少なかったが統計学的有意差はなかった。「授乳時間が長くて辛い」対照施設 6.7%、 BFHC3.1% (p<0.01)、BFHH6.2%(ns)、「授乳が頻回で大変」対照施設 19.0%、 BFHC12.8% (p<0.01)、BFHH18.3%(ns)と母乳育児推進のために必要な頻回・自律授乳に対してつらさを表明する母親がいるが、それも BFHC で有意に少ないことが注目される。身体的辛さを訴えるものは対照施設 3.8%、 BFHC1.6% (ns)、BFHH3.5%(ns)と少数であった。

対照施設での母乳栄養以外の母親の授乳中に感じることとして「授乳中に赤ちゃん

が可愛い」と感じる母親は母乳栄養 84.3%に対して、混合栄養 79%(ns)、人工栄養 73.1%(p<0.01)と少ない傾向があった。「つらい」は母乳栄養、混合栄養、人工栄養で 3.8%、19.9%(ns)、8.3%(ns)と統計学的には有意差は無かった。工栄養の母親ではミルクは楽と捉える者が 38.5 ある一方使用数ではあるがミルクは大変と感じている者も 15.4%存在していた。

表 19　対照施設での母乳栄養以外の母親の授乳中に感じること

混合栄養の母親	数	%
授乳中赤ちゃんが可愛い	112	79
心身に心地よい	16	11
つらい	28	20
混合は大変	12	8.5
N	141	

人工栄養の母親	数	%
授乳中赤ちゃんが可愛い	19*	73.1
ミルクは楽	10	38.5
ミルクは大変	4	15.4
つらい	3	8.3
n	36	

6)産後 1 月での育児状況

現在どんなときに幸せを感じるかでは一番多いのは「寝顔を見る」時であり対照施設 78.9%対して、BFHC85.4% (p<0.01)、BFHH84.4%(p<0.01)であり、ついで「成長を実感する」時、対照施設 70.8%対して、 BFHC70.1% (ns)、BFHH67.2%(ns)であった。そして「授乳中」対照施設 38.4%対して、BFHC50.2% (p<0.01)、BFHH44.7%(p<0.05)であった。夫の協力は対照施設ででは第 3 位であるが、BFH では第 4 位であった。すなわち対照施設 43.2%に対して、BFHC38.5% (p<0.01)、BFHH69.8%(p<0.05)と BFH の施設の方が夫の協力をあげるものが有意に少なかった。これは母乳育児という母親の身体的育児性の獲得により、母親達の自己肯定感・自己達成感が得られている可能性を示しているのであろう。

表 20　幸せを感じるとき

	ＢＦＨＣ		ＢＦＨＨ		対照施設	
	数	%	数	%	数	%
授乳中	991*	50.2	688**	44.7	146	38.4
寝顔を見る	1684*	85.4	1298*	84.4	300	78.9
成長を実感	1384	70.1	1034	67.2	269	70.8
夫の協力	759*	38.5	612**	39.8	164	43.2
その他	118	6	84	5.5	21	5.5
無記載	9	0.5	6	0.4	3	0.8
n	1973		1538		380	

*:χ二乗検定　p<0.01　　**:χ二乗検定　p<0.05

現在の辛いことの第 1 位は寝不足であるが、対照施設 49.2%対して、BFHC35.1% (p<0.01)、BFHH43.8%(ns)と BFHC では寝不足を訴える母親の比率が低かった。それに対比するように第 2 位の訴えは「寝てくれない」であり、対照施設 35.0%対して、BFHC28.5% (p<0.01)、BFHH30.6%(ns)、「泣きやまない」が対照施設 22.1%対して、BFHC18.9% (ns)、BFHH18.0%(ns)、であった。この時期の 85%の新生児が夕刻 4 時から明け方 2 時頃までよく泣くことからこの 2 つが関連しあっているものと思われる。

表 21　現在の辛いこと

	ＢＦＨＣ		ＢＦＨＨ		対照施設	
	数	%	数	%	数	%
寝不足	692*	35.1	674	43.8	187	49.2
身体が辛い	176	8.9	219	14.2	44	11.6
寝てくれない	562*	28.5	471	30.6	133	35.0
泣きやまない	373	18.9	277	18.0	84	22.1
頻回授乳	357*	18.1	387	25.2	96	25.3
授乳時間が長い	266*	13.5	282	18.3	81	21.3
夫の協力がない	69	3.5	51	3.3	8	2.1
人間関係	119	6.0	85	5.5	23	6.1
その他	32	1.6	11	0.7	0	0.0
無記載	373	18.9	209	13.6	29	7.6
n	1973		1538		380	

*:χ二乗検定　$p<0.01$　　**:χ二乗検定　$p<0.05$

ついで「頻回授乳」対照施設 25.3%対して、BFHC18.1% ($p<0.01$)、BFHH25.2%(ns)、「授乳時間が長い」対照施設 21.3%対して、 BFHC13.5% ($p<0.01$)、BFHH18.3%(ns)と授乳に関わるものであった。また表２０にあげたようにこの時期に母親が幸せを感じる時は「我が子の寝顔を見る時」であることから、母親達はよく泣く我が子を必死になってなだめ、寝かせつけようとしており、その際に BFHC で出産した母親は自律授乳をおこなうことで、泣きをコントロールし、その結果、寝不足感が軽減されていることが推測される。

それ以外に「夫の協力がない」、「人間関係」をあげるものもあったが各群間に差は見られなかった(表２１)。

母親の心理状態を評価するために対児感情評定尺度を測定した。児に対する親近感を示す接近得点は対照施設 28.1±6.7 、BFHC 28.2±6.3 (ns)、BFHH27.4±6.4 (ns)と差が無く、20 点以下の親近感の薄い母親の比率も対照施設 10.3%、BFHC9.5% (ns)、BFHH11.7%(ns)と施設間の差は見られなかった。児に対する否定的感情を示す回避得点についても対照施設 6.8±4.3 、BFHC6.6±4.6 (ns)、BFHH6.3±4.6 (ns)と差が無く、10 点以上の児への否定的感情の強い母親の比率も対照施設 22.4%、BFHC22.2% (ns)、BFHH19.6%(ns)と施設間の差は見られなかった。さらに児に対する両価的感情を示す拮抗指数についても対照施設 26.0±19.5 、BFHC24.3±18.7 (ns)、BFHH24.6±22.4 (ns)と差が無く、30 点以上の児への両価感情の強い母親の比率も対照施設 31.8%、 BFHC29.8% (ns)、BFHH31.3%(ns)と施設間の差は見られなかった。

表22 対児感情評定尺度

接近得点

	BFHC	BFHH	対照施設
平均	28.2±6.3	27.4±6.4	28.1±6.7
<20	187 9.5%	180 11.7%	39 10.3%
≧20	1786 90.5%	1358 88.3%	341 89.7%

回避得点

	BFHC	BFHH	対照施設
平均	6.6±4.6	6.3±4.6	6.8±4.3
<10	1535 77.8%	1236 80.4%	295 77.6%
≧10	438 22.2%	302 19.6%	85 22.4%

拮抗指数

	BFHC	BFHH	対照施設
平均	24.3±18.7	24.6±22.4	26.0±19.5
<30	1732 68.7%	1080 70.2%	264 69.5%
≧30	625 31.3%	458 29.8%	121 31.8%
n	1973	1538	380

この時期の母親の悩みの上位を占めるのが「寝てくれない」「泣きやまない」であったので、我が子の扱いやすさについての母親の評価を検討した。Easy Baby と Difficult Baby という子どもの育て易さへの評価があるが、我々は新生児の泣きを母親がどう捉えるかが早期の評価になると考え、泣きやすさとなだまりやすさについて調査した。泣きやすさについては「すぐに泣く」としている母親は対照施設 9.7%、BFHC9.0% (ns)、BFHH9.0%(ns)、「あまり泣かない」は対照施設 27.1%、BFHC%26.4 (ns)、BFHH27.7%(ns)といずれも施設間での有意差はなかった。

なだまりやすさについても「泣きやまない」とした母親は対照施設 19.2%、BFHC22.0% (ns)、BFHH17.2%(ns)と BFHH でやや少ない傾向があったが統計学的有意差は無かった。「すぐ泣きやむ」は対照施設 16.1%、 BFHC%17.3(ns)、BFHH21.6%($p<0.05$)と BFHH でなだまりやすいと捉える母親の比率が有意に多いことが分かったがその理由は不明である。

子どもの扱いやすさについては「とても扱いやすい」とした母親が対照施設 7.6%、BFHC%10.5 (ns)、BFHH10.6%(ns)と施設間による差が無く、反対に「とても扱いにくい」は対照施設 1.1%、 BFHC0.6% (ns)、BFHH0.7%(ns)とこれも施設間による差はなかった。

こうしたことから子どもの気質は周産期のケアによらず既に形成されてしまっているか、母親が子どもをいかに操作するかも出産前に決定しているのかもしれない。

表 23　我が子の扱いやすさの評価

泣きやすさ	BFHC		BFHH		対照施設	
	数	%	数	%	数	%
すぐに泣く	177	9	139	9	37	9.7
よく泣く	1229	62.3	954	62	234	61.6
あまり泣かない	521	26.4	426	27.7	103	27.1
無記載	46	2.3	19	1.2	6	1.6
なだまりやすさ	BFHC		BFHH		対照施設	
	数	%	数	%	数	%
泣きやまない	434	22	265	17.2	73	19.2
少しして泣きやむ	1171	59.4	928	60.3	245	64.5
すぐ泣きやむ	342	17.3	332**	21.6	61	16.1
無記載	26	1.3	13	0.8	1	0.3
扱いやすさ	BFHC		BFHH		対照施設	
	数	%	数	%	数	%
とても扱いやすい	207	10.5	163	10.6	29	7.6
扱いやすい	590	29.9	442	28.7	119	31.3
普通	1002	50.8	788	51.2	195	51.3
扱いにくい	143	7.2	129	8.4	33	8.7
とても扱いにくい	12	0.6	11	0.7	4	1.1
無記載	19	1	5	0.3	0	0.0
n	1973		1538		380	

**:χ二乗検定　$p<0.05$

7)産後の憂うつ

出産は女性にとってある意味で危機であり、その身体的・心理的・社会的大転換への適応が困難な場合に鬱状態になることが知られている。そこで産後1月までの時点で憂うつになったことがあるかどうかについて設問を設けた。33%～39%の母親は憂うつになった体験があると答えている。このうち憂うつになることが「よくある」が対照施設 4.7%、 BFHC%2.2($p<0.01$)、BFHH2.9%(ns)と BFH で少ない傾向があり、特に BFHC では対照に比較して有意に少なかった。逆の「全くないに」ついても対照施設 10.3%、 BFHC%13.8(ns)、BFHH14.4%($p<0.05$)と BFH で多い傾向があり、特に BFHH では統計学的に有意に多かった。

そして憂うつになった体験のある母親に対してその時期を聞いたところ「出産後すぐ」が対照施設 20.7%、 BFHC%20.5(ns)、BFHH32.9%($p<0.01$)と BFHH で出産した母親に多かった。退院後と答えた母親は対照施設 60.3%、 BFHC%65.1(ns)、BFHH61.3%(ns)と一番頻度が高かったが、BFHC に多い傾向はあるものの統計学的には有意差はなかった。産後2週間以後と答えた母親は対照施設 19%、BFHC%14.5%(ns)、BFHH5.8%($p<0.01$)と BFHH で出産した母親が有意に少なかった。

こうしたことから、1/3以上の母親が憂うつになるが分娩・産褥期のケアによりその頻度に差があり、しかも施設によって憂うつになる時期に差があることが注目される。

表 24　憂うつになることがありますか

	ＢＦＨＣ		ＢＦＨＨ		対照施設	
	数	%	数	%	数	%
よくある	43*	2.2	45	2.9	18	4.7
ときどきある	606	30.7	508	33	130	34.2
あまりない	1046	53	763	49.6	192	50.5
全くない	273	13.8	221**	14.4	39	10.3
無記載	5	0.3	1	0.1	1	0.3
n	1973		1538		380	

その時期はいつですか

	ＢＦＨＣ		ＢＦＨＨ		対照施設	
	数	%	数	%	数	%
出産後すぐ	106	20.5	142*	32.9	25	20.7
退院後	337	65.1	265	61.3	73	60.3
産後２週以後	75	14.5	25*	5.8	23	19
n	518		432		121	

この憂うつな体験を産後１ヶ月の時点でエディンバラ産後うつ評価表を用いて評価した。産後うつスコアは対照施設 6±3.6 、BFHC% 5.8±3.4(ns)、BFHH 6.0±3.4 p<ns)と施設間での差はなかった。またスコアが１０点以上のハイリスクの母親の比率についての検討でも対照施設 13.5%、 BFHC%13.3%(ns)、BFHH13.5%(p<0.01)と施設間による差はなかった。このことから実際にうつになってしまう頻度については施設間における差はなく、その後の適応過程において病的なものにまで悪化していくのか、回復していくのかに分かれる可能性があり、産後１～2 ヶ月の間の支援が必要であると推察される。

表 25　ＥＰＤＳ

	ＢＦＨＣ	BFHH	対照施設
平均	5.8±3.4	6.0±3.4	6±3.6
n	1973	1538	377
<10	1711(86.7%)	1315(85.5%)	326(86.5%)
≧10	262(13.3%)	223(14.5%)	51(13.5%)

8)次回の出産について

次子を望かどうかは経済的・社会的条件以外にも妊娠・出産・産褥期の体験が影響する可能性があるので、次子の出産を希望するかどうかについての設問を設けた。

産後１月では次の出産を考えることは難しいと思われるが、この時期にまた生みたいですかという問いかけに対してやはり 40%以上の褥婦はまだ考えられないという回答であった。しかし、なかには既にこの時点で「何人でも欲しい」対照施設 9.5%対して、 BFHC15.5% (p<0.01)、BFHH18.4%(p<0.01)、「楽しいのでまた生みたい」対照施設 5.5%、 BFHC7.2% (ns)、BFHH5.3%(ns)と出産に意欲を示す褥婦がいた。

表 26　また生みたいですか

	ＢＦＨＣ		ＢＦＨＨ		対照施設	
	数	%	数	%	数	%
何人でも欲しい	306*	15.5	283*	18.4	36	9.5
一人ではかわいそう	464	23.5	367	23.9	85	22.4
楽しいのでまた産みたい	143	7.2	82	5.3	21	5.5
まだ考えられない	816	41.4	673	43.8	167	43.9
無回答	244	12.4	178	11.6	79	20.8
n	1973		1538		380	

*:χ二乗検定　p<0.01　　**:χ二乗検定　p<0.05

生みたくない理由として最も多かったのは既に子を持っているからであり、対照施設 58.1%、BFHC50.5% (ns)、BFHH58.4%(ns)であり、ついで仕事を優先するため対照施設 32.9%、BFHC31.6% (ns)、BFHH28.3%(ns)、第３位は経済的な負担対照施設 12.3%、BFHC12.7% (ns)、BFHH11.1%(ns)であった。出産、授乳、育児の負担は上位３位には入らなかったが、出産がつらいという理由は対照施設 12.3%、BFHC5.7%(p<0.01)、BFHH10.5% (ns)と BFHC では有意に少ないことが注目される。授乳がつらい母親は約 10%程度、育児がつらい母親は 1～2%程度と少なく、施設間の差は見られなかった。

表 27　生みたくない理由

	ＢＦＨＣ		ＢＦＨＨ		対照施設	
	数	%	数	%	数	%
上の子がいるので	473	58.4	326	50.5	90	58.1
仕事を優先	229	28.3	204	31.6	51	32.9
経済的負担	90	11.1	82	12.7	19	12.3
出産がつらい	46*	5.7	68	10.5	19	12.3
授乳がつらい	79	9.8	76	11.8	16	10.3
育児が大変	7	0.9	12	1.9	2	1.3
家族の協力がない	15	1.9	7	1.1	1	0.6
n	810		646		155	

*:χ二乗検定　p<0.01　　**:χ二乗検定　p<0.05

次回も同じ施設で出産するかという問いかけは産婦と分娩施設との信頼関係ができたかどうかについての設問であり、その施設で受けたケアに対する全体としての評価を示すものであると考えられるが、「はい」と答えたものは対照施設 60.5%、BFHC83.3% (p<0.01)、BFHH90.7%(p<0.01)であり、はっきりといいえと答えた母親は対照施設 1.0%、 BFHC0..2% (p<0.05)、BFHH0.4%(ns)と少なく、BFH に対する信頼度は極めて高いといえる(表２８)。

表 28　次も同じ施設で出産しますか

	ＢＦＨＣ		ＢＦＨＨ		対照施設	
	数	%	数	%	数	%
はい	1790*	90.7	1281*	83.3	230	60.5
いいえ	8	0.4	3**	0.2	4	1.1
わからない	132*	6.7	214*	13.9	128	33.7
無記載	43	2.2	40	2.6	18	4.7
n	1973		1538		380	

考察

健やか親子課題 2 の妊娠・出産の安全性と快適性の調和と不妊での対応の中で、妊娠･出産の安全性と快適性とはともすれば両立しないものととらえられがちであるが、我々は本来この 2 つの命題は対立するものではないと考えてきた。すなわち安全性が保証されない快適性は存在しないし、快適性そのものは生むものが自ら妊娠・出産に対して主体的に取り組むことであり、その主体性が安全性の根幹を形成するものと規定した。従って分娩を扱う産科施設が妊産婦のこの主体的取り組みを支援することで快適で安全な出産が可能となり、その帰結が産後の母乳育児の成功につながっていくと考えた。その大きな目的を達成していると考えられる WHO/UNICEF の推進する母乳育児推進のための 10 カ条を満たす赤ちゃんにやさしい病院について 3 年間にわたる調査をおこなってきた。今回は母親達の体験を対照施設と比較した。

その結果出産場所選択理由は赤ちゃんにやさしい病院に認定された診療所、病院での母乳育児推進、母子同室があげられ、特に診療所では食事や友人の推薦にも影響を受けていた。逆に選択理由として対照施設に比較して少なかったものは出産場所が近い､綺麗などであり母乳育児へのモティベーションが高いものが集まる傾向があった。対照施設では母子別室の施設も存在しているが、それを選択理由としてあげるものは少なかったことより、現在ではむしろ母親達の意識は母子同室に向かっていると考えられる。

妊娠・出産を主体的過ごすには適切な情報を妊婦に与え、教育する必要があるが、赤ちゃんにやさしい病院では出産と産褥の準備のための妊婦教室の評価が高かく、出産・産褥に対する妊婦の理解が得られやすくしていることが伺える。

分娩法の希望は自然分娩志向と帝切忌避が診療所の特性としてあげられていたが、周産期母子医療センターレベルが多い病院では対象施設とは差がなかった。実際の分娩では診療所では有意に頭位経腟分娩が多く、吸引分娩、帝切が少なく、産婦の生む力を引き出すように分娩が介助されていると考えられた。病院でも吸引分娩が少なく、同様な取り組みがされていると解釈されるが、地域の周産期医療の中核病院が多いため帝切はむしろ対象施設より多く、逆に安全な出産への管理と決断が適切になされていると考えられる。そうしたことから赤ちゃんにやさしい病院で出産した母親は対照施設に比較して施設の安全性については不安なしが病院、診療所ともに有意に多く、しかも診療所でははっきりと不安を表明する者が有意に少なかった。

快適性への評価は大変満足が病院、診療所ともに多かった。さらに診療所では不満を表明する者が有意にすくなかった。その結果赤ちゃんにやさしい病院での出産に対して有意に大変満足する者が多かった。さらに不満を表明する者は診療所で有意に少なかった。すなわち BFH での出産は安全で快適であり満足度が高いと評価され、特

に診療所での評価が高いことが注目される。

赤ちゃんにやさしい病院では出産直後から母子同室がおこなわれるが、対象施設の施設では3割弱の母親が出産前にそれをイメージしていたが、4割5分が母子異室であり母子同室の開始時期は出産直後から退院前日までと種々であり、1割の母親が出産直後からの母子同室を体験したに過ぎなかった。したがって産褥期の感想は母親達が体験した中でのものであり、赤ちゃんにやさしい病院では95%以上の母親が一緒にいれて嬉しいと答え、つらさをいう母親は 2%以下であった。対象施設では別室で身体が楽だ、よく眠れた、一緒だと大変だと思うなどの感想が多く、逆にお乳が張ってつらい、一緒にいたかった、気になって眠れないなどの母子分離の身体・心理的な否定的感想もあった。このことは産褥期の母親達は自分の体験の範囲で、自分自身を納得・正当化する傾向があるといえ、母子同室が褥婦にとって過大な負担になってはいないといえよう。

母親になった実感は当然なことではあるが 40%以上の母親が生んだ瞬間をあげているが、カンガルーケア、乳首を吸われた時、授乳がうまくなった時、抱っこして泣きやんだ時などの、母親の身体的育児性が出る内容について、赤ちゃんにやさしい病院で出産した母親と対照施設で出産した母親との間に比較的大きな差があり、それが幸せを感じるのは授乳中、寝顔を見る時という感想についても関連していると考えられる。特に赤ちゃんにやさしい病院で出産した母親が夫の協力が得られた時に幸せを感じる者が対照施設で出産した母親より有意に少ないことと関連し、いわば母性を強く感じ取っているといえる。

出産直後のカンガルーケアは80～90%の母親が感動したと答えているが、僅かではあるが、何となく怖かったと不安を感じる母親もいた。しかも不安を感じる母親の数が赤ちゃんにやさしい病院で出産した母親に少ないということは、分娩室で母子を見守る仕組みが対照施設に比較して作動していると考えられた。

母親が実行する栄養法の検討では希望する栄養法としていずれの施設でも 95%以上の母親は母乳栄養を希望していたが、赤ちゃんにやさしい病院で出産する母親は有意に是非母乳で育てたいという希望が多かった。実際にも産後1月で母乳だけで育てている母親は対照施設の約2倍に達しており出産する施設による差が顕著であることが示された。母乳栄養を確立するには出産後早期からの頻回授乳と、それをおこなうための母子同室にすること、そして母親が安心して我が子に没頭できることが大切である。対照施設での調査では、時間授乳や母子分離による児の啼泣にあわせて、母親か児が移動し、この時期には不明である「不足分をミルクで」、「出るまでミルク」を与えるという混乱に満ちたケアが母親に提示されている。さらに夜間はただでさえ少ない看護スタッフが授乳したり、昼間同様母親か児が移動するという、考えてみると極めて煩雑なケアが行われていることになる。そうした授乳法を身につけた母親にとって退院後も安心して母乳育児継続すること困難であると考えられた。

授乳中に赤ちゃんが可愛いという感想は施設によらず、84%以上の母親達に共通した感想であったが、対照施設での混合栄養、人工栄養となった母親ではその感想が低く、73～79%であった。この差は施設による差というよりも授乳形態による我が子への親密度の差による者と考えられる。

産褥1月で幸せを感じる時は我が子の寝顔を見る時が最も多く、ついで成長を実感する授乳中、夫の協力であるが、授乳中と夫の協力については赤ちゃんにやさしい病院で出産した母親と対照施設の母親とでは逆転していた。これは赤ちゃんにやさしい病院で出産した母親は身体的・心理的結合度が強く、いってみれば我が子を妊娠中と同様に自分の一部として捉える傾向があるためと考えられる。一方対照施設では我が

子を夫と協力して育てる客体と捉えていると考えられる。その両者の違いが現在の辛いこととして寝不足、眠ってくれない、頻回授乳、授乳時間が長いなどを負担ととる母親の比率が赤ちゃんにやさしい病院で出産した母親に少ないのであろう。

この時期に母親は我が子についてイメージを育てていくが、我が子の扱いやすさについては分娩施設間の差がなく、10～20%の子どもはよく泣き、なだまりづらく、扱いにくいことになる。したがって対児感情評定尺度には施設間の差は無かった。そのなかで、接近得点が低い母親が 10%程度、回避得点が高い母親が 20%程度、拮抗指数が高い母親が 30%程度存在すると言うことはこの時期から妊娠・出産・産褥期の支援以外の育児支援がこの時期から必要なことを物語っている。

この時期に女性達は母親というアイデンティティを獲得するために身体的・心理的・社会的大転換をおこなわなくてはならず、一種の危機を体験する。その危機に直面した時に生じるのがうつ的状態であるといえる。したがってこの時期に憂うつになった体験のある母親は赤ちゃんにやさしい病院で出産した母親に少ない傾向があるものの 30～40%に及んでいる。興味深いのは周産期母子医療センターが多い病院レベルでは他の施設に比較して入院中に多いこと、産後２週間をすぎてからは少ないことである。これは有床診療所と異なり、病院での心理的支援がどうしても表層的なものとなりがちであることを示していると同時に、適応過程である憂うつは早期に生じた者はそれを早い時期から自ら克服しているのかもしれない。

産後１月の時点でのうつをスクリーニングするエディンバラ産後うつスコアはハイリスクの比率は出産施設による差はなく、13～15%であった。したがって前述したようにこの時期に特有な支援が行われなくてはならないものと考えられた。

この時期に次子への期待を持つ者は４割弱存在し、赤ちゃんにやさしい病院で出産した母親は何人でも欲しいと願う者が対照施設に比較して多いことが注目される。その理由として出産がつらいと答えた母親の比率が低い事があげられる。これは安全で主体的な母親にとって出産体験が肯定的にとらえられているためではないかと推察される。それは次の出産も赤ちゃんにやさしい病院で生むと答えた母親が対照施設の母親に比較して圧倒的に多いことからもうなずけよう。

結論

妊娠出産の快適性とは生む女性が主体的に妊娠出産産褥期に向き合うことである。妊娠出産産褥期に向き合うために考えなくてはならない快適性とは身体変化、生むエネルギーを集中するための生理的快適性、そして我が子との交流、医療医者との連携を達成する心理的快適性、そして具体的に乗り越えていくための行動的快適性の３つの要因を総合したものと定義づけられる。そうしてみるとそれぞれの要因だけでなく総合された快適性の最も根底にあるものが安全性を保障することである。安全性の保障は妊娠・出産・産褥期におきる様々な病態に医療が対処することと、そのような事態を予防するために医療とケアを妊娠中の生活・分娩・産褥期の全てに関わりあうことが必要である。しかし周産期には予測できない緊急事態が生じることがしばしば生じることも事実であり、それに対応するための医療社会的枠組みを整え、二重・三重の安全性の保障のもとに、きめ細かい快適性を獲得するケアが重要である。そうした枠組みのなかで妊娠・出産・産褥期を主体的に向き合った母親は満足感・自己肯定感・自己達成感が得られ、その後の育児を進めていく基盤を築いていくと考えられた。なお、産後２ヶ月までに生じる母親と子ども・家族との間に生じる葛藤や心理的問題に対処するための仕組みを今後導入すべきであることも申し添える。

お　願　い

母乳育児は赤ちゃんにとってもお母さんにとっても大切なことで、お母さんをお母さんらしく、赤ちゃんを心身ともに健康に育てると言われています。しかし、お母さん方は、実際に、母乳で育てられるのだろうか、本当にお乳が出るのだろうかといった期待と不安が入り交じった状態で開始されることが多いようです。私たち日本母乳の会は、母乳育児の支援と推進をしてまいりました。お母さん・お父さん・ご家族の皆様が安心して子育てを行えるように支援をしております。

今回、厚生科学研究として“赤ちゃんにやさしい病院”で、出産し、育児を開始したお母さん方の現状を知りたいと思い、質問用紙による調査をさせていただきたいと考えました。この調査を通して子育てについての調査結果を今後の我が国における母子保健に反映させたいと存じます。

この研究で私たちが知った個人名や個人情報は公表されることはなく、データだけが集計されます。ご安心下さい。　もし、この調査にご賛同いただければ、ご協力をお願いいたします。

日本母乳の会運営委員長　　山内芳忠

アンケート内容

・お母さまの年齢をお教えください。　　＿＿＿＿歳

・お子様の日（月）齢をお教えください。　　現在（　　日目）頃、　（　　カ月）頃

・お子様の出生は、妊娠の何週で生まれましたか。（　　）週

・生まれたときの体重は　　（　　）ｇでした。

・分娩様式をお教えください

経膣自然分娩、　吸引分娩、　和痛、　無痛分娩、　帝王切開（○をつけてください）。

・性別は、　男の子　　女の子　（○をつけてください）。

・何番目のお子さんですか（　　番目）。

アンケート項目（該当するものに○をつけてください）。

Ⅰ．現在の育児についてお伺いします

1）栄養法は

①母乳だけ　②ほとんど母乳　③混合栄養(母乳が多い)　④混合栄養(人工乳が多い)　⑤人工乳だけ

2）今、楽しいこと、うれしいことはどんなこと（時）ですか（複数回答可）

①　授乳しているとき　②　寝顔を見ているとき　③赤ちゃんの成長を実感したとき

④　夫が協力してくれたとき　⑤　その他　（　　）

3）今、大変なこと、つらいと思っていること（時）は何ですか（複数回答可）

①　頻回授乳　②授乳に時間がかかる　③泣き止まない　④赤ちゃんが寝てくれない

⑤　自分の体がつらい　⑥寝不足と思う　⑦　夫の協力がない　⑧家族との人間関係

4）気分が憂鬱になることがありますか

①よくある　②ときどきある　③あまりない　④全くない

5）よくある、時々あると応えた方へ、それは、何時頃からですか

①出産後すぐから、　②家に戻ってから　③　産後　　日目ごろから

それは、どんな時ですか（　　）

6）自分が母親になったと感じたのはどんなときですか

①赤ちゃんを生んだ瞬間　②カンガルーケアのとき　③乳首を吸われたとき

④　家に戻ってから　⑤授乳がうまくいくようになったとき

⑥　赤ちゃんを抱っこして泣き止んだとき

7）あなたは”赤ちゃん”を頭に思い浮かべた時に、どのような感じがしますか。下の言葉を見たときに、どの段階に当てはまるでしょうか。あなたの気持ちに合うところに○をつけて下さい。

＜記入例＞　うるわしい　|――○――|――|――|

あまり深く考えないで、直感的に判断して下さい。

	非常にそのとおり	そのとおり	少しそのとおり	そんなことはない		非常にそのとおり	そのとおり	少しそのとおり	そんなことはない
あたたかい					あかるい				
よわよわしい					なれなれしい				

うれしい				あまい			
はずかしい				めんどうくさい			
すがすがしい				たのしい			
くるしい				こわい			
いじらしい				みずみずしい			
やかましい				わずらわしい			
しろい				やさしい			
あつかましい				うっとうしい			
ほほえましい				うつくしい			
むずかしい				じれったい			
ういういしい				すばらしい			
てれくさい				うらめしい			

あなたのお子さんについての印象を下のスケールに○で記載して下さい

すぐに泣く　　よく泣く　　あまり泣かない

泣き出すと泣き止まない　　泣き出しても少しして泣き止む　　泣き出してもすぐ泣き止む

とても扱いやすい　扱いやすい　　普通　　扱いにくい　　とても扱いにくい

8）最近の１週間に、あなたが感じられたことに最も近い答えにアンダーラインを引いて下さい。
　必ず、１０項目についてお答え下さい。

例）私は幸せである。・・・・・たいていそうです。
　　いつもそうではない。
　　全く幸せではない。

［質問］

1.　笑うこともできるし、物事のおもしろい面もわかる。
　(0) いつもと同様にできる。
　(1) あまりできない。
　(2) 明らかに出来ない。
　(3) 全くできない。

2.　物事を楽しみにして待つことができる。
　(0)いつもと同様にできる。
　(1)あまりできない。
　(2) 明らかにできない。
　(3) 全くできない。

3.　物事がうまくいかない時、自分を不必要に責める。
　(3) 常に責める。
　(2) 時々責める。
　(1) あまり責めない。
　(0) 全く責めない。

4.　理由もないのに不安になったり、心配する。
　(3) 全くない。
　(2) ほとんどない。
　(1) 時々ある。
　(0) しょっちゅうある。

5.　理由もないのに恐怖に襲われる。
　(3) しょっちゅうある。
　(2) 時々ある。
　(1) ほとんどない。
　(0)全くない。

6.　することがたくさんある時に
　(3) ほとんど対処できない。
　(2) いつものようにうまく対処できない。
　(1) たいていうまく対処できる。
　(0) うまく対処できる。

7.　不幸せで、眠りにくい
　(3) ほとんどいつもそうである。
　(2) 時々そうである。
　(1)たまにそうである。
　(0) 全くない。

8.　悲しくなったり、惨めになる。
　(3) ほとんどいつもある。
　(2) かなりしばしばある。
　(1) たまにある。
　(0) 全くない。

9.　不幸せで、泣けてくる。
　(3) ほとんどいつもある。
　(2) かなりしばしばある。
　(1) たまにある。
　(0) 全くない。

10. 自分自身を傷つけるのではないかという考えが浮かんでくる。
　(3) しばしばある。
　(2) ときにある。
　(1) めったにない。
　(0) 全くない。

Ⅱ産院を選んだ理由を伺います
①近くだから　②母乳育児に熱心だから　③母子同室だから　④食事が美味しいと聞いていたから
⑤友達に聞いて　⑥家族にすすめられた　⑦建物がきれい　⑧「赤ちゃんにやさしい病院」だから
Ⅲ　妊娠中のことについてお伺いします
1）妊婦教室や両親教室の情報についておたずねします
①　大変役立った、　②少し役立った、　③あまり役立たなかった、　④よく理解できなかった
2）妊娠中、母乳で育てることについては、どう思っていましたか
①　是非、母乳で育てたい　②出来るだけ母乳で　③できたら母乳で
④人工乳でも母乳でもどちらでも良い　⑤人工乳で育てたい
3）妊娠中、母子同室については、どう思っていましたか
①生まれてからずーと一緒にいること　②私が少し休んでから一緒にいること
③夜だけは預けられること　④できれば別室で過ごしたい
4）お産はどんなご希望でしたか
①出来るだけ自然に生みたい　②麻酔分娩で痛みをとって生みたい　③.帝王切開で
④.特になし　⑤その他（　　）
Ⅳ　出産、入院中のことについてお伺います
1）お産について
①実際のお産は大変満足できた、　②ほぼ満足できた、　③少し不満であった、
④不満だった（その理由　　）
2）出産後のカンガルーケアについて
①とても感動した　②少し感動した　③あまり感動しなかった　④なんとなく怖かった　⑤夢中で覚えていない　⑥その他（
3）出産直後からの母子同室をしてみての感想は
①赤ちゃんといつも一緒にいてうれしかった　②赤ちゃんといつも一緒で、つらかった
③赤ちゃんといつも一緒で、つらかったけれど、うれしくなった
③赤ちゃんといつも一緒で、うれしかったけれどもつらい気持ちが多かった
4）母乳について
①授乳していると赤ちゃんがかわいい　②授乳は自分の心身に心地よい　③授乳しているとつらい
④授乳が長くてつらい　⑤授乳が頻回で大変だ　⑥.自分の体がつらい
Ⅴ　次の出産について伺います
1）次の子も産みたい
①子どもは何人でも欲しい　②子どもが１人ではかわいそう
③出産、授乳が楽しかったので、また、生みたい　④まだ、考えられない
2）次は生むつもりはない
①____子までいるので　②出産がつらかったので　③授乳がつらい　③子育てが大変
④夫や家族の協力がない　⑤仕事を優先したい　⑥経済的に大変　⑦その他
Ⅵ．最後に、あかちゃんにやさしい病院での支援について
1）妊娠中、分娩、産後の支援や快適性はいかがでしょうか
①大変に満足、　②ほぼ満足　③満足　④不満が残る(その理由　　)
2）妊娠中、分娩、産後における安全性はいかがでしょうか
①不安を案じた事はない　②少し不安があった　③不安を感じた
3）次の出産をされる場合には、「あかちゃんにやさしい病院」で出産されますか
①はい　②いいえ　③わからない
ご協力ありがとうございました。

コントロール群においての追加質問

3-1)お産の後、お母さんと赤ちゃんは同じ部屋で過ごしましたか
① いいえ　② 分娩室を出てからすぐ　③ 出産後６時間から　④ 出産後 12 時間から
⑤ 出産後 24 時間後から　⑥ 出産後３日目から　⑦ 退院前日　⑧ 出産後__時間から昼間だけ　⑨その他
3-2）赤ちゃんとの生活について伺います
①赤ちゃんと離れていて、授乳が大変だった　② 赤ちゃんのことが気になってよく眠れなかった
③赤ちゃんと別だったので、よく眠れた　④ おっぱいが張ってしまって、つらかった
⑤赤ちゃんと別だったので、体が楽な気がした　⑥ 赤ちゃんといつもいっしょにいたかった
⑦赤ちゃんといつも一緒だと大変と思う　⑧ 赤ちゃんと離れていて、赤ちゃんのことがよくわからなかった

授乳について

4-1)授乳についてはどんな方法ですか

① 3時間ごとに授乳室で ② 赤ちゃんが泣いたら呼んでくれ、母親が授乳室へ ③ 3時間ごとに母親の元に来て授乳④ 泣いたら赤ちゃんを母親のもとに連れてきて授乳 ⑤ 母乳が足りない分ミルクを補う ⑥ お乳が出始めるまでミルクをあげる

4-2)夜間の授乳について

①夜間はスタッフがミルクを飲ませてくれた ②夜間も3時間ごとに授乳室で
③夜間は赤ちゃんが泣いたら呼んでくれる

4-3) 母乳の方におうかがいします

①授乳していると赤ちゃんがかわいい ②授乳は自分の心身に心地よい ③授乳しているとつらい
④授乳が長くてつらい ⑤授乳が頻回で大変だ ⑥.自分の体がつらい
⑦あなたの体の調子はどうですか(　　)

4-4) 混合の方におうかがいします

①授乳していると赤ちゃんがかわいい ②授乳は自分の心身に心地よい ③授乳しているとつらい
③ミルクとの混合は大変と思う。④ミルクを足すのが大変

4-5) ミルクの方にうかがいます

①授乳していると赤ちゃんがかわいい
②ミルクは楽(赤ちゃんがよく寝るから、泣かないから、自分の体を使わないから楽、夜自分が寝られるから、夫や姑が飲ませられるから、その他　　)
③ミルクは大変(調乳が大変、夜中の(調乳が大変、金銭的に大変、その他　　)
④いつからミルクで育てていますか(　　日目ごろ)
⑤あなたの体の調子はどうですか (　　)

アンケート調査協力の「赤ちゃんにやさしい病院」

総合病院北見赤十字病院 (北見市)
旭川医科大学附属病院 (旭川市)
公立芽室病院 (北海道芽室町)
津軽保健生活協同組合健生病院(弘前市)
黒川産婦人科医院(盛岡市)
山形市立病院済生館(山形市)
国家公務員共済組合連合会東北公済病院(仙台市)
日本赤十字社医療センター(東京都渋谷区)
宇津野医院(下妻市)
横浜市立大学附属市民総合医療センター(横浜市)
あわの産婦人科医院(富山県入善町)
富山県立中央病院(富山市)
済生会高岡病院(高岡市)
杉田産婦人科医院(甲府市)
山田産婦人科(西尾市)
ごぎそレディースクリニック(名古屋市)
石井第一産科婦人科クリニック(浜松市)
高田医院 (岐阜県神戸町)
西川レディースクリニック(多治見市)
上田市産院(上田市)
国立病院機構三重中央医療センター(津市)
笠松産婦人科・小児科 (阪南市)
国家公務員共済組合連合会舞鶴共済病院 (舞鶴市)
加古川市民病院 (加古川市)
国立病院機構岡山医療センター(岡山市)
サンクリニック (岡山市)
梅田病院 (光市)
吉野産婦人科医院(島根県斐川町)
鳥取県立中央病院 (鳥取市)
くぼかわ病院 (高知県四万十町)
森下産婦人科医院 (福岡市)
聖マリア病院 (久留米市)
産科婦人科愛和病院 (古賀市)
内野産婦人科医院 (佐賀市)
ゆのはら産婦人科医院 (熊本市)
熊本市立熊本市民病院 (熊本市)
熊本市立熊本市民病院附属熊本産院 (熊本市)
国立病院機構長崎医療センター (大村市)
井上産科婦人科 (佐世保市)
くまがい産婦人科 (大分市)

アンケート調査協力の対象施設

聖マリアンナ医科大学附属病院(川崎市)
鈴木産婦人科医院(川崎市)
日本医科大学付属武蔵小杉病院(川崎市)
国立病院機構高知医療センター(高知市)
国立病院機構 高知病院 (高知市)
高知県立安芸病院 (安芸市)

健やか親子21推進協議会

課題2
妊娠・出産に関する安全性と快適さの確保と不妊への支援

幹事会　議事録

(平成17年度～平成18年度)

●健やか親子21推進協議会　課題2「妊娠・出産に関する安全性と快適さの確保と不妊への支援
第14回「健やか親子21推進協議会・課題2」の幹事会議事録

日　時：平成17年5月20日（金）18：00～20：30		
場　所：日本産婦人科医会会議室		東京都新宿区市谷八幡町14　市ヶ谷中央ビル4F
	日本産婦人科医会	朝倉　啓文、田中　政信、宮崎亮一郎、大村　浩、西井　修、鈴木　俊治、塚原　優己、前村　俊満
	日本助産師会	岡本喜代子、山本　詩子、神谷　整子、豊倉　節子、江角二三子、川島　広江、山田美也子
	日本母乳の会	橋本　武夫、堀内　勁、杉本　充弘、永山美千子
	厚生労働省	田母神裕美（主査）、市川　香織
司　会：日本助産師会		岡本喜代子

司会：岡本　資料の確認をいただきます。「健やか親子21」の取り組み等に関しまして、産婦人科医会と母乳の会で資料を用意していただいております。助産師会は今日持ってくるのを忘れまして、失礼を致しました。

それから、昨年度の研究の各団体のまとめと、健やか親子協議会の幹事会のまとめです。「全国産科施設における母乳育児実施状況調査」で、母乳の会の方がまとめたものです。「バースプラン普及のための産科医の意識調査」は産婦人科医会でまとめです。日本助産師会は「病院診療所と助産所とのネットワーク推進及び院内助産所の在り方に関する研究」の冊子を用意しております。

17年度の研究の計画等の申請書です。あと、助産師会から17年度の研究の議事録と、日本母乳の会からの提案でセミナーの開催です。「産科医のための母乳育児セミナー」開催の検討内容の資料です。その他に、母乳の会の方からシンポジウムのお知らせ、ニュースレターを用意していただいております。なければ事務局の方にお申し出いただければと思います。

それでは、次第に沿いまして進行させていただきたいと思います。今日は日本助産師会の岡本が司会を担当させていただきます。厚生労働省の方は後でご挨拶をいただきたいと思います。

永山(母)　産科婦人科学会の役員が替わりまして、東北大学の岡村先生、順天堂大学の吉田先生、東京成育医療センターの北川先生が今度「健やか親子」の担当になるということです。久保先生は外れられたとのことですが、不妊のテーマがあるので是非とも出席のお願いをしましたが、幹事会には出席できないということですね。研究についてはよいということですが、久保先生は今日は学会出張があって来られません。今後この不妊についての話し合いと、学会のご出席のご出席について、後で話し合ってください。そういう状況で今日は3人ともご出席できないというご連絡でした。

司会：岡本　はい、ありがとうございます。今日は「不妊への取り組み―現状と問題点」ということでお話をいただく予定だったんですが、この辺も今日はカットということで進めたいと思います。

それでは、「平成16年度厚生労働科学研究報告」ということで、まとめを含めまして「日本母乳の会」の橋本先生、お願い致します。

橋本(母)　昨年の12月2日に「健やか親子21推進協議会」の総会がありまして、第2課題のこれまでの経過を一応のまとめとして、ご報告させていただきました。これも前の会議に出していますので、その流れは参加者がほとんど確認していただいていると思いますので、改めて詳しい説明は今日は省かせていただいて、必要があればまた目を通していただくということでお願い致します。

司会：岡本　ありがとうございます。先生のところの研究の報告も引き続いてお願いします。

堀内(母)　「全国産科施設における母乳育児実施状況調査」というテーマです。今回は時間もなかったものですから、母乳育児がうまく行っていると思われるWHO・ユニセフ認定の「赤ちゃんにやさしい病院」（Baby

Friendly Hospital）についての調査を行いました。そこでお産をされた方達のお母さんへの調査です。診療所で出産された方を今回は対象にさせていただきました。病院で出産された方が抜けています。

アンケートの内容は後ろの方に入っておりますので、それを後でご参照ください。母乳育児とそれから産後のお母さん達の心の状況を知りたかったものですから、ETDS、それから胎児感情評定尺度、そういう評価の項目も少し入れて調査させていただきました。

それから、この課題 2 のテーマですので、親から見た快適性、自分のお産がどうだったかということを漠然とした質問になってしまいましが、聞いてみました。それから、印象として安全だったかどうかということも少し入れて調査しました。正確なことは分らないのですが、一応クライアント側からの評価ということで、ご覧になっていただきたいと思います。

結果はグラフに出しておきました。BFH ですから、母乳率とかその他は極めて高い、トータルで母乳をやっている方は 90 数%という高さになります。それから完全母乳と呼んでいますが、母乳だけで他のものを一切飲んでいない方達が 85～86%が、産後 1 カ月の時点ですがなっています。

1 カ月健診に来たお母さん達を対象にしています。ちょうど 1 カ月前後というのは少しお家に帰って様々なことが混乱がそろそろ静まるか、或いは盛り下がっているかという時期のデータです。この時期だと自分のお産を振り返るのにちょうどいい時期だと思います。1 年経ってしまうと大分、印象が変りますので、その時期の調査ということになります。

流れとしては、妊娠中の母親学級、それからお産の場所、その選択理由ですね。図 1 をご覧ください。実際には BFH を対象にしたものですから、母乳育児を推進しているとか、母子同室をしているがあげられています。それから、もう 1 つ大きな要因は、自宅から近いということがやはりあるんですね。中村班でやっている産科施設の安全性というところで集中型を、或いはオープンシステムをお考えになっているようですが、やはりどこの施設で調査をしても近いという要因は必ず出てきます。日本の医療がアクセスするのは容易な体系にはなってきたものですから、それは当然のことのようになっています。

それから、BFH だから選んだというのが 3 位から 4 位に出てきています。

実際にこの研究を始める前に快適性ということには食事だとか、きれいだとか、そういうものがあるのだろうと思ったんですが、それは比較的少ない回答のようです。この 10 カ条は妊娠中から準備をしていて出産に至って産褥期を過ごすことではじめて達成されるものですから、その評価として妊婦学級について調べてみましたけれども、だいたい満足できるような評価で出ていたようです。

それから、お産も自然分娩志向が強くて、今回は希望した分娩方式と実際にした分娩様式を調べてみましたけれども、だいたい望んだお産になっている方が 82～83%でしょうか。そうすると、10 数%の方はやはり産科の安全性の問題に関るんだと思いますけれども、そのぐらいのパーセントの方達は思い通りのお産にならない。帝王切開などですけれども。だから、開業の先生のところが対象で、ハイリスクを扱っているわけではないんですが、そのぐらいの危険率はあるんだということですね。満足度についてですが、やはり相当、満足度としては高いという結果を得られました。

それから、母乳育児についてですけれども、「是非、母乳で育てたい」、「できるだけ育てたい」がほとんどで、必ずしも全員が是非ということではないんですが。実際に産後の実際の栄養法をみていただきますと、母乳だけ 85.5%、ほとんど母乳が 5%、少量補充しているものが 5.6%、ほとんど人工栄養のものが 2.8%、こういう値で、だいたい 95～6%は母乳、或いは母乳を中心にという結果が得られました。

表をみていただくと完全母子同室と書いてありますが、お母さん達の希望は「ずっと一緒にいたかった」というのが 85%いらっしゃるわけですね。それから、少数ですけれども「少し休んでから母子同室」というイメージをもっている方もいらっしゃるようです。それから、比較的多くの病院でやられている「日中だけ母子同室」ということですけれども、親側からすると 1.5%しかないという結果でした。

それから、「完全母子同室」の感想ですが、「嬉しかった」というのは 7 割ぐらいいらっしゃる。しかし、やはり身体的なこと、様々な「子どもと直面しないといけない」こと、いろいろなことがこの時期に集中するものですから、「辛いが嬉しい」というこんな答えが多くあります。だけど、「嬉しいけど辛い」という方はそれほど多くなかったようです。

それから、「母親になった実感がわいたとき」というのは、やはり「産んだ瞬間」、それから「赤ちゃんが自分のおっぱいを吸ってくれたとき」、それから「抱っこして泣きやんだとき」です。あまりこういった調査は今までされていなかったんですけれども、お母さんの心の面を知る上では「抱っこして泣きやむとき」なんていうのは、非常に重要なポイントかと思います。

それから、出産直後のカンガルーケアの感想ですが、これを図表をみていただきますと、やはり「とても感動した」という方がかなりいらっしゃるのですが、それでも「少し感動した」とか、「あまり感動しなかった」という答えもあるんですね。だから、カンガルーケアをやりさえすれば全員が感動するかというと、そうでもなさそうです。多分、提供される場の問題だとか、お産が立て込んでいる場でお母さんと赤ちゃんだけが取り残されたカンガルーケアというのは、お母さんにとっては辛い体験にもなりますので、そんなことで出たんではないかと思います。

それから、出産施設に対しての評価としては、快適性についても「大変満足」「ほぼ満足」を入れると、90%以上の方が満足をされていらっしゃるようです。それで、安全性については少し低い。「不安なし」と答えた方が72.9%ですから、やはり安全性の保障というのはお母さん側からいっても、もう少し高める必要があるのかもしれません。これはあくまでも主観的な評価ですから、医会の先生方がお調べになっている客観的な評価と比較してみていただけることが大事だと思います。

それから、「また、産みたいですか」という質問をしました。産後1カ月で「産みたいですか」という質問もないかと思いますが、あえてやった質問なんですけれども、そうすると結構「産みたい」方もいらっしゃるんですね。「何人でも欲しい」という方が15%以上いらっしゃいます。だいたい38%ぐらいの方が「今は考えられない」という方がいらっしゃるんですけれども、産後1カ月で「楽しいのでまた産みたい」という方が8%いるというのは、少子化対策としては喜ばしいことではないかと思うんですけれども。

それから、産みたくない理由は、やはり「きょうだいの多さ」「授乳が辛い」という声がありますね。それから、もう1つ特徴的なのは、「仕事を優先にする」というのが30%ぐらい、「経済的負担が大きい」これも12%ぐらいですから、やはり予測されていた通りにこの辺のところが1つの足を引っ張る要素になっているんですけれども。経済的負担というのはこれからの育児において重要な意味をもつとは思いますが、それでも12%ぐらいなんですね。意外と少ないといったらいいかもしれません。

それから、今回はBFHの病院だったので、「次回はBFHで出産しますか」という質問ですけれども、これは90%弱ぐらいです。それから、実際にお家に帰ってから「幸せを感じるとき」はという質問については、一番は「寝顔をみるとき」なんですね。大変さが伺えますよね。育児そのものが楽しいんじゃなくて、赤ちゃんが黙って寝てくれているときがいちばん幸せと感じているんです。それから、「成長」だとか、「授乳のとき」もあります。それから、もう1つ大事なのは、「夫の協力」というのが40%近くあるんですね。ですから、夫が協力してくれている側には40%の方が幸せと感じるんですけれども、そうすると60%の方は夫が協力してくれないのか、或いは夫の極力が嬉しくないのか分りませんけれども、この辺も育児支援をする上では考えなければいけないことかもしれません。

それから、「授乳中にかんがえること」、これは「赤ちゃんがかわいい」というのがいちばん多いですね。「辛いこと」、これはばらけていますけれども、「喘息」「眠ってくれない」「泣きやまない」「長い授乳時間」「頻回授乳」、この辺の実際に直接子どもと関る、或いは自分達の生活リズムの問題が大きく出ています。これはすべてをとってあげればいいということではなくて、この時期をどうやって支えてあげるかの方が重要な意味を持ちますので、その辺の違いの仕組みを考えるべきなのかなと思います。

それから、「憂鬱になること」。これは産後うつが多いものですから、或いは産後うつ的状態といった方がいいのかもしれませんけれども、調べた数なんです。自覚されている方です。それで「よくある」「ときどきある」、これが30%以上あるんですね。それから「まったくない」という方は15%弱ぐらいしかありません。そして、それは退院後が圧倒的に多いんですね。だから、入院中はまだ周りに医療者がいますから良いんでしょうけれども、退院後に出てくる産後1カ月間の支えというのは、これから重要になってくるのではないかと思います。3週間以後にも4.8%、5%ぐらいにそれを抱えている方がいらっしゃるようです。

それを実際にもう少し客観的な治療としてエディンバラ産後うつスコアをとってみました。一応9点で切った